優秀賞

○○らしさとは？

土浦市立土浦第五中学校　九年
山口　優一

この前、テレビを観ていたら日曜日に放送されているある時代ドラマでこんなシーンがありました。大正時代、女学校の教師をしていた元陸上選手の主人公は女子スポーツの普及に力を尽くします。主人公の指導により生徒たちは陸上競技やテニスといったスポーツを楽しむようになります。しかし、その姿は生徒たちの保護者や世論から「それは女らしくない」「はしたない」と批判を受け、スポーツの指導をした主人公は学校を辞めさせられそうになります。すると生徒たちは「女らしさって何ですか？」「どうせ男が勝手に決めたんですよね？じゃあ男らしさも女に決めさせるべきです」と反発する、というストーリーでした。もちろん現在では女性のスポーツは当たり前になり、多くの人がスポーツを楽しんでいます。しかし、ドラマで描かれた時代から百年以上たった今でも、このような問題はある気がします。○○らしいという言葉はよく聞きますが、その誰かによって造られた価値観によって、自分のしたいことができないのは良くないことだと思います。

僕が疑問に思った○○らしさ、それは学校の校則に登場する「中学生らしい」という言葉です。中学生らしい髪型や靴や靴下の色、それはその校則を作った人の中にある中学生らしさという価値観なのではないかと思います。中学生らしいという価値観は、一人一人違ったものを持っていると思います。

僕は学校で生徒会役員をしています。僕の学校では、校則について生徒のみんなから見直しを求める声がたくさん寄せられました。生徒みんなで「どこまでならばいいの

か」をしっかり考えて校則の見直しをする取り組みをしました。靴と靴下についての校則の見直しが行われ、「この色までならいいのではないか」「この色はちょっと派手すぎるかな」などと様々な意見が寄せられ、それを生徒会で取りまとめ、先生方に見直しのお願いをして、もうすぐ改正が決定する見込みとなりました。

最近では「ブラック校則」という言葉や、大手のヘアケアメーカーが主導した「#この髪どうしてだめですか」という髪型についての校則を考えるプロジェクトも話題になりました。もちろん校則は「なんでもオッケー」というのは駄目ですが、「ルールだから絶対に守れ」「中学生らしくないといけない」というのに縛られるのではなく、一人一人の価値観を大切にして見直しを行っていくことが大切だと思います。

以前、あるテレビ番組で、詩人の茨木のり子さんの、「自分の感受性くらい自分で守ればかものよ」という詩を耳にしました。戦争の時代を生き抜いた茨木さんは戦時中、「お国のために死ね」という世論に対して子ども心に、おかしいんじゃないかという思いがあったそうです。でもそんなことを言ったら非国民だからそれを押し込めていた、だから自分の抱いた疑問に対して不安になったとき、自分の感受性で間違えたならいいけど、人からそう思わされて間違えたときは、取り返しのつかない嫌な思いをする、という経験から生まれた詩だそうです。

このように「〇〇らしさ」「自分らしさ」というのは、過去の歴史の出来事の中や、現在でも様々な場面で考えさせられることの多いことだと思います。

五月から始まった、新時代「令和」、この元号は「一人一人が明日への希望と共に、それぞれの花を咲かせることのできる時代」とされていました。そんな時代にするにはどうしたらいいのか、僕は一人一人がもっている「自分らしさ」というものをみんなが大切にして、認め合っていけることが大切だと思います。